

新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る

平成 30 年度 業務報告書

1. 入館状況について

平成 30 年度総入館者数 518,980 人(対前年度比 98.6%)

[総括]

指定管理者として2年間の指定管理期間のうち、最終2年目の管理運営を行った。充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様サービスを第一に努めた。

集客施設での入館者数は、減少傾向を辿ることが一般的であり当館も例外ではなく、平成 25 年度のリニューアルオープン時の入館者数と比較すると年々減少傾向である。しかし、毎年大きな落ち込みは見られず、今年度は 518,980 人のお客様にお越しいただき、対前年度比 98.6%と若干の減少はあったが、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である入館者数 510,000 人以上を維持することができた。

入館者数を月別でみると、4 月は上越市立水族博物館のリニューアル工事に伴う休館により、観光客が新潟市周辺に向けられたと思われ、さらに隣県に向け割引クーポン配布などの入館促進を図ったことで対前年度比 125.4%となった。入館者数も 38,606 人となり、4 月としては平成 2 年のオープン以来 4 番目に多い人数で、幸先の良いスタートとなった。5 月はゴールデンウィーク期間中の入館者が対前年度比 114.2%と上回ったが、その後の遠足による幼稚園・保育園の入館者数が伸び悩んだため、最終的に 101.9%という結果となった。6 月上越市立水族博物館のリニューアル工事に伴う休館により、前年度比 110.7%、累計でも 110.1%で、昨年度を上回る入館者数を推移していた。しかし、6 月 26 日に上越市立水族博物館「うみがたり」がグランドオープンしてからは、当館の入館者数に大きな影響を与えた。それに加え、市内中央区に「ポップサーカス新潟公演」が開催されたことにより、前年度比 88.9%と大きな落ち込みとなった。さらに最も多客となる 8 月は、記録的な猛暑も重なり多くの方が外出を控えたことも影響し、対前年度比 85.5%と 2 ヶ月連続で 1 割を超える落ち込みとなった。7・8 月の 2 ヶ月で約 23,000 人が昨年度と比較し減少した。9 月は祝日を含めた 3 連休が 2 回あったことで、前年度比 106.2%と昨年を上回ったが、上半期終了時点で前年度比 97.7%と昨年度を下回っていた。行楽シーズンとなる 10 月では、再び上越市立水族博物館「うみがたり」グランドオープンの影響があったと思われ、前年度比 88.8%と 1 割を超える落ち込みとなった。11・12 月は微増ではあるが、ほぼ昨年度並みとなった。今年の冬は暖冬、少雪となり、記録的な降雪、寒波となった昨年度と比べお客様にとって、来館しやすい条件となった。1 月は昨年度並みであったが、2 月は昨年度と比較し約 5,700 人増え、対前年度比 130.8%と増加した。3 月は昨年度並みであった。

昨年度に引き続き、冬場の集客対策として、年間パスポート購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」や成人の日企画「新成人及びその同行者の入館料免除」、「2019 年カレンダープレゼント」などのイベントを実施し、入館者促進を図った。

6 月 26 日上越市立水族博物館「うみがたり」グランドオープンした。その影響により 8 月終了時点で対前年度比 96.5%まで落ち込んだが、下半期に、冬季の暖冬・少雪の影響により改善はされたが、最終的に対前年度比 98.6%となった。冒頭申し上げたが、集客施設ではリニューアルオープン後、減少傾向を辿ることが一般的な中で、前年を下回ったものの、6 年続けて 500,000 人を維持できたことは、一定の水準を達成できたと考えている。入館者数は、「休みの連なり方」や天候により左右されるが、今後も展示や

企画内容・実施時期などに工夫を凝らすことで、入館者数の増加及び平準化に努めていきたい。

パスポート購入者は、過去最多の購入者であった昨年度の 14,011 人からさらに 224 人増加し、14,235 人ものお客様に購入していただき、最多購入者数を更新した。例年どおり、積極的に年間パスポートの宣伝を行ったことや、購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」、館内出口付近に当日の入館券に追加料金をプラスすることで年間パスポートに切替ができるというポスター掲示やチラシの設置を継続して行ったことで、より多くのお客様から年間パスポートへの切替をしていただいた。パスポート所持者の平均年間来館回数が 1 人あたり 5.9 回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も期待できる。

申請や手帳による減免での入館者は、「身障者等手帳(対前年度比 96.7%)」「老人施設(対前年度比 80.1%)」「小・中学校(対前年度比 97.1%)」「保育園・幼稚園等(対前年度比 99.1%)」と減少しているものの、減免利用者総入館者数は、24,665 人と総入館者に占める減免利用者の割合は 4.8%となっており、当館の果たすべき社会的役割は依然として大きいと考えている。

毎月実施しているアンケート調査では、展示生物に対する満足度が 96.5%を確保しており、「楽しかった。また来ます」「また来てみたいと思うほど、展示内容が豊富で楽しかったです」「子どもがわくわくしながら見ました」「海の底にいるようで癒されました」「色々な生き物が見れて勉強になりました」などの感想が寄せられている。また、「ファミリー向けの休憩場などがあってありがたい」「解説がわかりやすかった」「とてもキレイで見やすく良かった」と展示生物以外でも好意的な声が寄せられている。

今後も、常におもてなしの心を持ち「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、新たなお客様の獲得とリピーターの確保に努めたい。

2. 施設の管理運営状況について

(1) 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

[総括]

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

例年行っている繁忙期における開館時間の繰り上げ・延長は、行った日すべて年間平均入館者数を超えており、市民サービスの提供という目的を十分に果たしたのではないかと考えている。

まず、ゴールデンウィークは 5 月 3 日～5 日について開館時間の 30 分繰り上げを実施した。曜日の並びにより 3 日間の実施であったが、県外及び帰省による入館者が増加し、水族館へのアクセス道路が大変混雑するため、入館者の時間帯ごとの平準化や、周辺道路の混雑緩和に有効であった。

次に海の日とその前日である 7 月 15 日と 16 日について開館時間の 30 分繰り上げを実施した。さらに 8 月 11 日～14 日のお盆時期について、開館時間の 30 分繰り上げ及び閉館時間の 1 時間延長を実施した。ゴールデンウィーク同様、入館者数も平準化されたのではないかとと思われる。例年のお客様の入館動向を把握し、適切な開館時間の繰り上げ・延長を実施し市民サービスのため目的を十分達成した。

例年 1 月 2 日・3 日は、市民サービスのため臨時開館を実施している。みなとトンネルからの人の流れも多く、マリニピア日本海の周辺道路は、護国神社の初詣客で、三が日は朝早い時間から込み合う。初詣客の入館促進を図り、正月開館も定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第 42 条に基づく電気設備法定点検を 3 月 7・8 日で実施した。従来からの休館日は「12 月 29 日から 1 月 1 日」と「電気事業法に基づく電気設備法定点検実施のため 3 月の第 1 木曜日とその翌

日」しかなく、今後も工事スケジュールを組むことが困難となる場合がある。

今後も開館時間の変更については、お客様の入館動向を把握し、適切に開館時間の繰り上げ又は延長を実施し、費用対効果を図りながら市民サービスに努めていくことが必要である。

(2) 展示生物について

[総括]

協定書の仕様書に謳われている約 500 種、20,000 点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

生物交換や採集等で活魚輸送専用車両を計画的に運用し、展示コンセプトに沿った沿岸性生物や深海性生物、温帯・亜熱帯性生物等を搬入した。

飼育困難魚への飼育展示にも積極的に取り組んだ。他園館の協力を受けて、日本海大水槽で初となるクロヘリメジロザメを展示することができた。新潟県内各地の漁業協同組合の協力により、特に深海性生物の収集、展示に努めた。アバチャン、トクビレ、ガンコ、ナガヅカ等の魚類の他、日本海固有種である両津湾産サラサベッコウタマガイを常設展示した。

また、飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。昨年に引き続き、アカムツ(通称＝ノドグロ)の人工育成技術開発に取り組み、育成個体を「#18」水槽に群れ(600 個体)で常設展示した。ホトケドジョウ、シナイモツゴ、キタノアカヒレタビラ、キタノメダカを「信濃川水槽」に、クラゲ類、コウイカ、クロベンケイガニ、アカテガニ、シロボシアカモエビ、アカハライモリ、ホトケドジョウ、シナイモツゴ、トミヨ属淡水型(イバラトミヨ)を「育成室」に展示した。タツノオトシゴは親個体から第 3 世代となる育成個体を「アマモ場水槽」に展示した。

4 月と 3 月にゴマフアザラシの繁殖、また今年初めてフンボルトペンギンがお客様から見える巣穴で育すうを行い、水族館で産まれる・育つ様子を来館者が観察できる展示に繋がった年であった。

パスポート利用者を意識し、季節感のある展示更新を心掛け、1～2 ヶ月で内容を更新する季節展示を行った。サケ、カワヤツメ、サドガエル、ハクバサンショウウオ等、季節だけでなく、地域を特徴づける生物を積極的に導入した。

東日本では唯一となるラッコは、高齢であることを考慮して良好な健康状態を維持し、給餌解説も行っている。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていきたい。

(3) 通年事業の実施状況について

[総括]

① ペンギン解説

ペンギン散歩道(夏期はペンギン海岸)でペンギンが歩く様子等を見ながら、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。実施場所は屋外観覧導線に面しており、およそ 10 分の解説時間の中で気軽

に立ち寄って解説を聞き、満足すると立ち去る来館者も多く、実施規模の割に参加人数の多いイベントとなっている。

② イルカショー

時刻を定めて解説を行う行動展示で、高い展示・教育効果が期待される。

水生哺乳類の自然史や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことに目的をおいている。

「イルカショー」では、ハンドウイルカ 2～3 頭、カマイルカ 1～2 頭を交代で用いて 1 日に 4～5 回、1 回約 20 分のイルカショーを行った。イルカの種類、体の特徴、認知、行動能力などを解説し、楽しく学べるイルカショーを心がけた。また、ショーへの参加者を最大 5 名に増やし、体表やヒレ、歯、噴気口(鼻)などに触れたり、間近で観察しその感想をうかがう内容とした。参加者の生の感想を伝えることで体験をショー観覧の来館者と共有し、より多くの方がイルカを理解することになっていることであろう。多客期には 1 日の実施回数を増加し、より多くの方々が快適にショーを楽しんでもらえるよう配慮した。毎回のイルカショー後には、イルカに関する疑問が解消できるよう質問受付を実施した。毎月実施しているアンケート調査では、概ね高評価を頂いている。

③ マリンサファリ給餌解説

トドを用いて 1 日 2 回、形態や生態、野生の状況、人との関わり等についての解説を実施した。体重 1 トン近い大型のオスを直接コントロールして飛び込みなどをさせる園館は他にほとんどなく、来館者から大変好評を得ている。

④ ひれあし類解説

午前のマリンサファリ給餌解説終了後、マリンサファリ内でゴマフアザラシとカリフォルニアアシカに餌を与えながら解説した。アザラシ科とアシカ科の形態の違いなど、トドの解説では伝えることができない鰭脚類の分類を中心に解説を行っている。

⑤ 日本海大水槽解説

水生生物や海洋環境に関する知識の普及を目的に、日本海大水槽前で飼育員が解説を行った。展示生物の紹介から水族館のしくみまで多角的な情報を伝えるプログラムとして取り組んでいる。

今年度は、日本海に生息している生物のうちカツオ類の紹介も解説に取り入れた。日本海に生息しているイメージの低いカツオ類の紹介をすることで、海洋生態系や日本海の生物多様性について理解を深めてもらう良い機会になったと実感している。

⑥ 磯の生き物解説

磯の体験水槽で、生物を 1 日 1 回、解説を交えながら近くで観察してもらう構成としている。多客時はブース内でマイクを使用し、参加者に声が届くように努めた。観察用プラケースの貸し出しをおこない、生物をいろいろな角度から観察できるような工夫をした。来館者と直接対話するプログラムとしたことで、生物の扱い方や、生息環境への理解を深めるのに有効であったと実感している。

⑦ アクアラボ体験

アクアラボで水生生物に対する知識と理解を深めることを目的に、顕微鏡・カメラ・大型液晶モニター

を用いて、観察や解説を行った。参加者の年齢に合わせて季節感を考慮した日替わりのテーマに沿って実施し、たいへん好評であった。

今年度は、新たに 8 タイトルを追加して実施し、水生生物の知識普及に積極的に務めた。

(4) 生物展示関係イベント等の実施状況について

[総括]

- ① 企画展示「深海には何がある？水中探査機で見た日本海」（期間：平成 30 年 2 月 23 日～4 月 8 日）
ふくしま海洋科学館と共同で水中探査機による海洋調査を実施し、その際に得られた最新の調査内容を公開した。新潟県寺泊沖の水深 103～208mの映像を大型スクリーンに投影して紹介した。また、撮影された生物を中心とした生体展示や日本海の構造や特徴などを紹介するパネル展示も行ない、日本海の海洋環境への知識普及に務めた。普段見ることができない深海の構造や生物を知る展示を実施したことで、海洋環境への理解を深める良い機会とすることができた。
- ② 企画展示「育てる-マリンピア日本海の繁殖・育成-」（期間：4 月 27 日～6 月 17 日）
水族館では、産卵や出産を含む繁殖の営みが展示水槽で行なわれ、ふ化した幼生や仔魚、出産された個体の育成は可能な限り行なっていることなどを紹介した。魚や無脊椎動物は、本来の生息環境や繁殖状況・生活史などから条件を推測しながら試行錯誤して育成を行い、ゴマフアザラシやフンボルトペンギンなど安定した育成がみられる種は血統の管理を行いながら個体群を維持している。これらの試みを紹介するパネルを作成して展示するとともに、顔出しパネルやペンギンの巣箱など模型展示も多く取り入れ、楽しく学べることを心掛けた。水族館の社会的な役割を理解していただける良い機会となったと考える。
- ③ 企画展示「新潟の外来魚-失われゆく多様性-」（期間：7 月 13 日～9 月 24 日）
新潟県内の外来魚を題材に取り上げ、地域固有の生態系を破壊し、生物多様性を消失させている現状を生物とパネルを用いて紹介した。国外外来魚に比べ認知度が低い国内外来魚や、第 3 の外来魚とされる野外放流された人工改良品種の問題も啓発した。多くの外来魚の存在と及ぼす問題を紹介することで、地域の自然を守り、取り戻したいという動機付けとなる機会を提供できた。付帯プログラムとして、講演会「参入する外来生物-変貌する水中世界-」を、講師を招いて実施した。
- ④ フォトコンテスト受賞作品展
応募期間：7 月 1 日～10 月 28 日（応募点数 341 点）
展示期間：11 月 22 日～1 月 14 日（展示点数 144 点）
今回が 5 回目の開催。募集期間を初夏から秋にかけてのオンシーズンとし、入賞作品の展示を冬期のオフシーズンにすることで、長期間に渡っての話題づくりとなることを想定して実施した。応募点数も昨年度とほぼ同数の 341 点（昨年度 340 点）であり、本企画が定着してきたと考えられる。
- ⑤ 企画展示「水深 100mを知る-水中探査機で見た！日本海の海底と生物-」（期間：12 月 1 日～3 月 31 日）
ふくしま海洋科学館と新潟県間瀬で水中探査機による海底調査を実施し、水深 128～176mで撮

影された地形や生物を映像とパネルを用いて紹介した。調査で得られた情報だけでなく、深海の水温や水圧などに関する情報発信もおこない、海洋環境や深海に生息する生物についての理解を深めてもらうことを心掛けた。調査で得られた情報を広く公開することで、水族館の行なっている活動を広める良い機会とすることができた。

⑥ 企画展示「海の生き物を集める-水族館の収集活動-」（期間:3月15日～5月26日）

水族館が行っている活動のうち、海洋生物の採集や輸送などの収集活動に焦点を当て、パネルを用いて紹介した。様々な形状をした網などの採集道具や4分の1スケールの活魚輸送車の模型展示なども併せて行い、仕組みや技術などがわかりやすく理解できるように工夫すると共に、これらの道具によって実際に採集、輸送された生物の生体展示も行ない、興味を持って観察していただけるような構成とした。収集活動が生物の多様性を伝え、環境に対する知識や保護意識の啓発を目的に行われていることや、収集活動によって得られた情報が野生生物の保全に役立てられたり、資源保護や持続的な資源利用のための研究に応用されたりしていることも紹介し、水族館の活動を理解していただける良い機会となった。

⑦ いきもの教室（自主事業）

4月から3月まで、全11回のプログラムを計画し実施した。11回は全て違うプログラムとし、対象年齢を小学生以上に設定した(4月「プランクトン」、7月「ペンギン」、8月「ウミホタル」は小学4年生以上)。全11回の応募数は定員に対して291.4%で、昨年度の189.6%に比べて多かった。応募者が多かったのは、7月「貝の標本づくり」340.0%、11月「みてみてクラゲ」320.0%、2月「かたちのふしぎ」490%、3月「サメの解剖」1135%であった。この中で2月「かたちのふしぎ」は、昨年度定員割れをしたプログラムであるが、今年度は館内募集やホームページに写真付きで掲載等の告知方法の変更と、本プログラムは対象を4歳以上と来館者に多い低年齢層向けであることを明確に記したことにより、館内応募が非常に多く結果的に5倍近い応募者となった。一方で4月「プランクトンの観察」、9月「ビーバーに注目」は定員割れをした。定員割れをしたプログラムは、開催時期や対象年齢の高さ、また明確な教室内容が伝わりにくいところにも一因があると考えられる。募集の告知は「市報にいがた」「当館ホームページ」「館内での募集」「ラジオやテレビ番組内マリナビアインフォメーション」「イベントポスターにチラシを同封し市内の小中学校に配布」などで行った。特にホームページがリニューアルした11月からは、写真付きで2ヶ月先のプログラムの詳細を掲載するようにした。ホームページをどれだけ応募者が確認したかは定かではないが、応募者が落ち込む時期にも関わらず、11月以降開催の5回の平均は461%と多数の応募となったことから、一定の効果があったと推察される。なおアンケート結果を見ると、94.3%の方が「とてもおもしろかった」「おもしろかった」と回答し、参加者の満足度は高かった。

⑧ にいがたフィールドガイド

にいがたフィールドを歩きながら案内し紹介するプログラムで、生息する動植物と絶滅危惧種の生息域外保全について解説した。終了時にリーフレットを配布し、観察できる動植物が季節によって異なることや情報の補足などに用いた。にいがたフィールドの魅力をより深く知ることで、身近な水辺環境への関心を持ってもらう機会になったと考える。入館者を対象に月1回約20分間のガイドとし、4月から11月と3月の計9回実施した。夏季の猛暑日や雨天時でも参加が見られたことから、入館者の興味に応えることのできたプログラムであったと感じた。

⑨ おやこいきもの体験（自主事業）

未就学児の参加可能なイベントプログラムがこれまで少なかったことから新たに実施した。対象年齢の2-6歳の子をもつ親は対象年齢未満の子がいる場合も多いため、おんぶや抱っこをする条件で0~1歳児の同伴も可能とした。

実施内容は、「見る」「さわる」「書く」の3つに体験を分けた。「見る」では、小型の水槽をこどもの視線に合わせ低いところに設置し、色・形・模様などに注目し観察した。「さわる」では、生物を入れたタライを会場の床に約15個準備し、セミエビやトラザメ・貝類・棘皮動物、海藻など接触可能な生物は実際に触りながら解説する形をとった。「書く」では、見たり、さわったりした体験を大きな紙に自由に書くことで、記憶の定義や理解を図った。親子で体験を共有することで生物に対する興味を高めることができたと考えている。

⑩ 世界カワウソの日イベント

5月の最終水曜日がInternational Otter Survival Fundにより「World Otter Day」と定められていることから、カワウソ類を飼育する国内約40園館と歩調を合わせる形で実施した。今年は新たな試みとして、カワウソ水槽で生き餌を与え、動きや食べる様子を解説した。

また、アクアラボ内でハンズオングッズ等を用いて、絶滅したニホンカワウソの基亜種であるユーラシアカワウソの生態や生息環境、それを取り巻く諸問題を知ること、環境意識の醸成につながることを目的とした。また、今年は、カワウソの仲間であるラッコも含め、種の紹介とラッコとカナダカワウソの毛皮をさわくらべ、毛の密度などの解説も行った。毎年実施して回数を重ねることによって認知度を上げ、より多くの方が身の周りの自然環境について考えるきっかけになればと考えている。

⑪ 田んぼ体験（自主事業）

リニューアルで造成した田んぼで田植えから稲刈り、脱穀までの稲作の体験と収穫したワラを使ったワラ細工体験をおこなった。6回目の実施となる。当館の事前募集プログラムとしては唯一の4歳以上という幼児も対象にしたプログラムであることから幼児を含む親子の応募が多かった。応募数は定員11~2組のところ59組の応募があった。

田植え、稲刈り、稲架がけ、脱穀、ワラ細工と稲作の一連の流れを体験でき、また、そこにいる生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境教育としても十分機能していると考えられる。

⑫ 海辺のいきもの観察会（自主事業）

水族館の地先海岸の砂浜にて、スナガニをメインに観察・採集を行い、砂浜を利用して生活する生物を理解、興味を深めることを目的として実施した。巣穴構造を理解してもらうために、石膏で型を取るなどの工夫をした。参加者全員がスナガニのことを知らず、身近であるが、意外と知られていない生き物であることが分かった。身近な生き物について紹介することで、地域の自然環境に興味を持って接してもらうきっかけを作ることができた。有意義なプログラムであったと実感している。

⑬ おやこですいぞくかん（自主事業）

幼児期に五感が発達し、この時期にいろいろなものを吸収すると言われていることから、生物の観察だけでなく、触れる体験も多く取り入れて実施した。触って、見て、楽しむことを重視したプログラムの構成としたことで、飽きやすい幼児期の参加者も集中を切らすことなく、最後まで参加してもらった。

ができた。未就学児を対象としたプログラムを実施できたことで、幅広い年齢の方に水族館を活用していただく機会を提供することができ、有意義なプログラムであったと実感している。

⑭ ゴマフアザラシ愛称募集及び「ヨイチ」命名式

4月1日に産まれたオスのゴマフアザラシの愛称募集を4月27日から6月17日まで館内で応募した。6,153通 2530種類の応募があり、館内で検討した結果「ヨイチ」に決定した。「ヨイチ」と名付けてくださった21人の方にはヨイチ記念ハガキとシールをプレゼントした。また21名の中から代表2名の方を選出し「命名式」(8月19日)に招待して記念品の贈呈と飼育エリアでヨイチの観察と解説を行った。

⑮ イルカバックヤードミニガイド

7月から11月の第2、第4土曜日、当日に参加者を募集してイルカのガイドを30分程度行った。計10回の開催で参加者はのべ121人であった。少人数を対象にしたガイド形式のプログラムで、参加者の反応を見ながら話を進めたり、質問に即応したりと、参加者の理解度に合わせてイルカについての情報を提供できるため、満足度も高かったのではないかと考えられた。

⑯ ナイトツアー（自主事業）

8月に3回、9月に1回20名の定員で4回実施した。合計定員80名のところ、応募総数は前年度比232%の494名であった。参加費が大人2,000円、小人1,000円と、当館のイベントの中では高額な部類に入る企画であるにもかかわらず、ナイトツアーの人気は高い。通常観ることのできない閉館後の夜の水槽の様子を観察してもらい、昼と夜での生き物の活動の違いや外観の変化等をツアーガイド形式で解説し、水生生物の生態や自然環境への関心を深めてもらった。完成されたプログラムとして継続を考える。

⑰ 大人向け写真教室（自主事業）

フォトコンテストと連動する形で実施した。水族館での楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することはとても難しい。しかし、これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について当館職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらえたと考えている。

⑱ 育成室開放

生物育成の成果は本館地下の育成室にて通年紹介している。育成室は観覧通路から室内を見学することを目的とした部屋だが、室内で直接観察を行うプログラムが昨年度まで好評だったことから、今年度も実施した。昨年度までと同様1日1回30分間、複数の職員が今年度育成した生物について、対話形式で紹介した。3日間の累計見学者数は118名であった。室内が狭いため適切な見学者数であったと考えている。来館者が知りたいことを飼育員が直接伝えられる良い機会であり、有意義なプログラムであったと実感している。

- ⑲ 講演会「参入する外来生物-変貌する水中世界-」（自主事業）
 企画展示「新潟の外来魚-失われゆく多様性-」に付帯して実施した。講師には、在来生物の保護活動や外来生物対策に取り組まれている新潟市潟環境研究所協力研究員を招いた。様々な外来の動植物が定着し、在来の動植物が姿を消すなど、移り変わる新潟の水辺の現状を紹介した。質疑応答では活発な意見交換が行われ、参加者が外来生物に関して考える良いきっかけとなったと感じられた。講演後のアンケート結果でも参加者の満足度は高かった。
- ⑳ 講演会「日本海北部における海洋環境と生物資源調査」（自主事業）
 企画展示「水深 100m を知る-水中探査機で見た！日本海の海底と生物-」に付帯して実施した。海について知り、考えるきっかけとすることを目的に、国立研究開発法人水産研究・教育機構の八木佑太研究員を招き、日本海区水産研究所の行なっている海底調査とその目的である資源量の評価や資源の管理方法などについて講演していただいた。専門家による最新の調査結果や調査目的について知れたことで、海について知り、考える機会を提供できた。講演後の質疑応答も活発に行われ、参加者からは、質疑の時間をもっと多く設けて欲しいとの意見も寄せられた。アンケートの満足度調査では高い評価が得られ、開催目的が達成できたことが伺えた。
- ㉑ 講演会「研究者が語るイルカの話-イルカの体のつくりについて-」（自主事業）
 水族館が鯨類の最新情報の発信場所となることを目的として、鯨類研究者による講演会を開催した。鯨類を調査研究してきた伊藤春香氏と植田啓一氏に講師を依頼し、伊藤氏は「イルカのかたち-海で暮らすための工夫-」、植田氏は「イルカの尾びれのはたらき-人工尾びれを作って分かったこと-」のタイトルで講演した。募集期間は短かったが、幅広い年齢層から計 46 名の参加があり、鯨類に対する関心の高さが伺えた。アンケートの結果も評価が高く、今後もこのような講演会を継続し、水族館を通じて様々な情報を伝えることが必要であると感じた。
- ㉒ 講演会「さかなの家系図から探る日本海の歴史」（自主事業）
 水族館や水生生物についてより深く知ってもらう事で、水環境について考えてもらうきっかけとし、大人に対しての教育の機会とすることを目的に実施した。国立研究開発法人水産研究・教育機構 日本海区水産研究所の研究者による「さかなの家系図から探る日本海の歴史」の講演をおこなった。あわせて、当館展示スタッフによる開催中の企画展示「水族館の収集活動」についての解説も行った。講演後のアンケートでも参加者の満足度は高かった。

（5） 企画イベントの実施状況について

[総括]

- ① 2019年オリジナルカレンダープレゼント
 毎年恒例のプレゼントとして、11月18日(日)から引換券を提示した先着1,600名へオリジナルカレンダーをプレゼントした。
- ② クリスマスツリー展示及び新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式
 11月23日(金・祝)から12月28日(金)の間、マリニピアホール(円柱水槽側)に高さ4.5メートル

のクリスマスツリーを展示した。また、初日は地域連携の一環として新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式及びクリスマスミニライブを実施した。

③ 門松展示

1月2日(水)から7日(月)の間、正面入口に門松を設置した。

④ 新成人キャンペーン

1月6日(日)～20日(日)の間、成人式会場で配付したクーポン券チラシやスマートフォンなどで当館HPのクーポン券などを提示した新成人及び同行者1名を無料入館とした。また、館内レストランの割引クーポン券も併せて配付した。期間中、587人の新成人とその同行者485人が来館した。

⑤ 年間パスポート販売キャンペーン

1月7日(月)～2月11日(月・祝)の36日間、昨年度に引き続き、年間パスポート購入者へ館内ショップ・レストランで使用できる割引クーポン(大人500円分、小人200円分、幼児以下にはシール)をプレゼントした。クーポンの使用期限を2月28日までとし、期間中2,754人が購入し、時期は異なるが、前年度(11/23～12/28:36日間)の2,383人を400人程上回った。

(6) 専門的な調査・研究等について

[総括]

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

日本動物園水族館協会の会議や研修会へ出席し、積極的な調査研究成果を発表すると共に、最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図っている。また、日本動物園水族館協会生物多様性委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。状況に応じて、特定外来生物が生態系に与える影響や、絶滅が危惧されている希少種についての情報を積極的に発信している。

ふくしま海洋科学館で開催された世界水族館会議に参加し、「Genetic Analysis and Conservation Activities in *Pseudorasbora pumila*」を発表した。日本動物園水族館協会の水族館技術者研究会では、「アカイサキの産卵行動と仔魚の形態」について発表した。関東東北・北海道ブロック水族館飼育技術者研究会では、「新潟市近郊の陸水環境を模した「いがたフィールド」とその活用」について発表した。日本鯨類研究協議会の水族館研究会では、「屋外展示施設にいがたフィールドの概要と生物について」を発表した。トレーニングセミナーでは、「イルカの力学」と「新潟市水族館における採尿トレーニング」を発表した。日本野生動物医学会大会では、「患部穿刺血液を用いたペンギンの趾瘤症起因菌の迅速診断の試み」を発表した。

他の研究機関との水生生物に関する研究も積極的に行なった。水産庁栽培漁業総合推進委託事業の一環として、国立研究開発法人水産研究・教育機構日本海区水産研究所、富山県農林水産総合技術センター水産研究所とアカムツの種苗生産技術の開発に関する研究を行ない、アカムツの親魚養成技

術の開発を担当し成果を報告した。県内の水族館・博物館との連携で取りまとめた「新潟県沿岸・沖合における海生哺乳類の漂着・混獲・目撃記録(2016年5月～2018年4月)」を日本セトロジー研究会で発表した。

研究成果の公開も積極的に行なった。ふくしま海洋科学館と共同で、水中カメラロボットによる日本海深海域の調査を行ない、その成果を企画展示で解説パネルや動画を用いて紹介した。

生体入手の困難な種の飼育展示のための調査・研究でも成果を得た。日本海を特徴づける魚類の展示種数を増やす努力をし、地域の自然の情報発信に努めた。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する「夏休み親子魚探検隊 2018」に協力し、水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況も明らかにした。新発田青年会議所が主催する「とりもどそう！新発田城おさかなパラダイス♪生物多様性保全作戦 IN 新発田城」に協力し、採集された水生生物の解説を行なった。タランベクラブの「夏の陣 H30 親子で水遊び」に観察会講師として参加し、現地で確認された水生生物について解説した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していきたい。

(7) 総合学習等の受け入れ状況について

[総括]

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、子供たちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めることを目的とした職場訪問といった目的の総合学習にも対応している。

来館した児童・生徒から、多数の礼状や感想が寄せられている。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

(8) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

[総括]

実習生等の受け入れとして、専門学校生を対象に「飼育実習」、大学生を対象に「インターンシップ」「獣医実習」「博物館実習」を行った。これは、博物館類似施設としての一面を持つ水族館として、専門学校生・大学生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行っていきたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を積極的に行った。内容は、大きく分けて「野外での観察等の指導」と「教室(屋内)での生物や仕事についての講義・指導」であるが、対象が小学生から一般と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

毎年度継続して実施している新潟大学臨海実習については、海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していきたい。小中学校への講師派遣は、小学校への職業講話が4校、中学校への職業講話が3校であった。

今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していきたい。

(9) 市民ボランティアの活動の状況について

[総括]

ボランティア活動の目的を大きく「水族館(専門家)と来館者(非専門家)をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。今年度は5月に新規募集をおこなった。新たに23人のボランティアを迎え、総勢109人となった。活動状況は活動日数193日、活動延べ人数717人であった。

今年度の活動の柱として「館内案内」「いきもの教室等館内のイベント補助」「アンケート調査」「研修」「磯の体験水槽解説」を設定して実施した。

特に「磯の体験解説ボランティア」に関しては、4年目となり認定者人数も増えたため、ゴールデンウィークおよびお盆の多客時はローテーションを組んで積極的に活動をしてもらい、展示生物の損傷減少と来館者への教育普及に大きく貢献していただいた。

新たな試みとして、9月にボランティア強化週間の設定、10月の「水族館で潟普請」での「みなとぴあ」のボランティアと交流、2月ボランティア総会全員参加を行った。また、今年度は3月に継続の意思を書面で確認した。ここ数年活動実績の無いメンバーが退会したこともあり、総勢77名となった。

今後とも、水族館、来館者、ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していきたい。

(10) 広報および広告宣伝について

[総括]

今年度の広報および広告宣伝について、上越市立水族博物館「うみがたり」の6月オープンの影響を考慮し、4・5月は長野を含めた県外への広報を強化、冬季は県内への広報を重点的に行った。またホームページをリニューアルし、見やすさと操作性を意識した画面作りと、アクセス比率が高いスマートフォンでも見やすい構成を意識した構成とした。

① テレビCMとラジオCM

テレビCMは、昨年度のCMを引き続き放映したが、12月にクリスマスツリー告知バージョン、1月に年間パスポート新規購入者向けキャンペーン告知のCMを製作した。12月と1・2月の告知バージョンはどちらも一定の効果があり、12月～2月の来館者数は前年度比108.1%であり、上越市立水族博物館「うみがたり」の影響がありながらもかなり入館者が回復した。

ラジオCMは、FM新潟、FMポート、FM山形、FM福島、信越放送(AM北信ローカル)で放送した。また、今年度はラジオの双方向性を意識し、BSNラジオでは、7月にリスナーからの質問を日替わりで回答する1週間特別企画を行った。加えて年間を通して毎月2回、夕方のFMにいがた「サウンドスプラッシュ」内で職員が生出演して旬な情報を提供するとともに、「教えて水族館の獣医さん」などテーマを設け、リスナーから質問を受け付け回答する企画を2回行った。リスナーから多数の質問が

寄せられたことから、双方向性を意識したメディアの活用は今後も研究していきたい。

② 雑誌などの紙媒体への広告

雑誌などの紙媒体への広告は昨年度実績をベースにしつつ、効果的に当館をアピールできる媒体を取捨選択して掲載した。

③ WEB

オウンドメディアを重視した展開を行った。当館ホームページ、Twitter、LINE@、Facebook などの更新をより頻繁に行うことで、情報の拡散に努めた。今年度から Instagram も開設した。現状では試験的で試行錯誤中ではあるが、情報発信ツールとして活用していきたい。また、ホームページのリニューアル後は、現場の飼育スタッフによる Twitter アカウントを新設し、今まで以上にタイムリーな動物情報の発信を心かけている。

④ 広報・プレスリリース

ここでは、プレスリリースの他、いわゆる「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」と位置づけることとする。小学校に直接配送するチラシを今年も行うとともに、出張展示として館外での生物展示や解説を積極的に行った。また直接担当記者へアプローチする積極的なプレスリリースにより、実際に取材に結びつくものが多くあった。特に 4 月 1 日に誕生したゴマフアザラシを早めにリリースした事により、白い毛の状態を多くメディアで取り上げてもらい、また記憶に新しいゴールデンウィーク前から愛称募集を再リリースしたことにより、3年前より2倍近い応募者があり効果が伺えた。

(11) 他園館との協力について

[総括]

のとしま臨海公園水族館、ふくしま海洋科学館、尖閣湾揚島遊園水族館、神戸市立須磨海浜水族園、志摩マリンランド、市立室蘭水族館、東海大学海洋科学博物館、鶴岡市立加茂水族館から、魚類等の生物交換を実施した。

しながわ水族館、神戸市立須磨海浜水族園、下関市立しものせき水族館、札幌市円山動物園、市原ぞうの国、よこはま動物園、長野市城山動物園、飯田市立動物園、いしかわ動物園、福山市立動物園とブリーディングローンを行っている。

鶴岡市立加茂水族館、ふくしま海洋科学館、上越市立水族博物館と共同で調査・採集活動を実施した。

鴨川シーワールドでカマイルカの人工授精を見学した。大阪海遊館でカマイルカのエコー検査手技と精液凍結設備を見学した。沖縄美ら海水族館からイルカのエコー診断について来館・技術指導を受け、職員向けのレクチャーも行った。

姉妹友好館のふくしま海洋科学館をホスト館として開催された「第 10 回世界水族館会議」の実行委員会メンバーとして参画した。

視察・研修として、宮津水族館 3 名、鴨川シーワールド 2 名、下田水族館 2 名、新江ノ島水族館 2 名、アクアワールド茨城県大洗水族館 10 名、東海大学海洋科学博物館 1 名、登別マリンパークニクス 1 名を受け入れた。

市民ボランティア活動では、他園館視察としてボランティア 26 名が上越市立水族博物館「うみがたり」を訪れ、バックヤード見学など有益な体験を得る事ができた。

(12) 年間入館パスポートについて

[総括]

今年度の年間パスポートの購入者は、14,235 人(総入館者の 2.7%)、パスポート利用者(購入者+リピーター)は 84,520 人(総入館者の 16.3%)となった。また、パスポート利用者の平均入館者数は 5.9 回であった。

購入者数は、過去最多であった昨年度の 14,011 人からさらに 224 人増加し、最多購入者数を更新した。また、入館者総数に占めるパスポート購入者、利用者の割合も年々増加傾向にある。昨年度に引き続き、館内外で積極的に広報したことや口コミによるお得感などが増加に繋がったと考えられる。特に、購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」を実施した際は期間中多くの方にご購入いただき、キャンペーンが来館のきっかけとなり、多くの市民にとって年間パスポートへの需要が潜在的にあることが改めて伺えた。今後も話題提供や特別展示などの情報提供を行い、年間パスポート会員が繰り返し来館していただくことが入館者増に繋がると考えられる。

アンケート調査での「生き物の展示」について 96.5%の人が「非常に満足」「満足」と回答しており、テーマや季節感に沿った特別展示などを行い、生物の変化を発見できたことが評価されたと考えている。他にも「毎回楽しい」「雨、雪、猛暑など外で遊べないことが多いのでマリンピアは年間楽しめて、ありがたいです。今後もよろしく願います」「イルカショーが毎回見せ方を変えていて何度見ても楽しい」などの声もいただいている。

また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては、「購入の予定なし」と答えた人が 2.5%で、85.8%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようにしていきたい。

(13) 市・他団体等との協力

[総括]

今年度に行政や他団体等と協力して実施した事業は以下のとおりである。

水族館の集客力アップや安心・安全強化のため、他施設・他団体との協力が不可欠であり、指定管理者だけではなしえなかったサービスを展開できたと考えている。多くのお客様から楽しんでもらい、満足してもらえたと思う。今後も、積極的に機会をとらえ、他団体や民間の持つ多様なチャンネルを活かした事業に組んでいきたいと考えている。

① 体験教室型イベント「だいしアカデミー」

8月23日(木)①10:00～12:15、②14:00～16:15(同プログラムを2回)に団体休憩室で表記イベントを実施した。この「だいしアカデミー」は第四銀行の社会貢献活動として 2013 年より実施しているもので、子どもたちがさまざまな分野のプロから学ぶ授業を企画実施している。2018 年度は 8 つのブ

プログラムがあり、当館はその中の「いきもの」のプログラムを実施した。

第四銀行から SDGs の目標 14(海の豊かさを守ろう)に関連したプログラムという希望があったため、「海をとおして私たちのミライを考えよう！」というワークショップ型の環境教育プログラムを小学4年生～6年生 27名(2回の合計)に行った。

② 新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設共通割引券」の導入

新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設利用促進」により、「文化・観光施設共通割引券」を実施した。新潟市だけでなく広域都市圏の方も割引で入館でき、3,821人のお客様が来館された。

③ 新潟大学医歯学総合病院 小児病棟への出張プログラム

6月27日(水)新潟大学医歯学総合病院小児病棟での出張展示をおこなった。ミズクラゲ・ギヤマクラゲ・キタノメダカの生体展示のほか、ぬり絵で缶バッチ作成・アシカやペンギンなどの等身大パネルの展示等を行った。

④ 一般社団法人日本自動車連盟(JAF)会員割引

全国的な自動車ユーザー団体である一般社団法人日本自動車連盟と連携し、会員に対し当館のPRを行い、会員証提示で割引を行った。入館促進が図られ、28,184人のお客様が来館された。

⑤ NEXCO「新潟・北信濃・会津 週末フリーパス」利用者への入館料割引

ETC車限定の新潟県内及び長野県北信濃地方・福島県会津地方のエリア内で、休日を少なくとも1日含む連続する2日間で高速道路乗り降り自由という内容で、申し込み画面を提示すると優待施設で割引のサービスが受けられるという企画に参加し、136人のお客様が来館された。

⑥ 内閣府が実施する「子育て支援パスポート事業」への協賛

内閣府の社会全体で子育て世帯を応援するという趣旨に賛同し、全国共通展開する「子育て支援パスポート」事業に協賛し、当該事業の会員に対し割引を行った。9,302人のお客様が来館され、新潟の観光促進と当館の入館促進が図られた。

⑦ 新潟市とイオン新潟南 包括連携協定記念イベント参加(ステージイベントに参加)

7月1日(日)イオン新潟南店でのイベントにて、来場者に対してクイズ大会を開催した。わかりやすいようにA1の写真を用意し、一問ずつ解説しながら行った。多くの方が参加され、予想以上に正解率が低く、対象を限定しない教育普及的な価値は高かったのではないだろうか。

⑧ 海フェスタにいがた 海の総合展ブース展示(セミナー開催)

海の総合展にてパネル展示を7月14日から29日の期間、メディアシップ2階フロアにて行った。

<ワークショップ>

7月15日「ラッコの話～一番小さな海のほ乳類～」(会場:メディアシップ1階)

7月21日「水のいきものクイズ」(会場:メディアシップ1階)

7月22日「海の豊かさを守ろう」(会場:メディアシップ1階)

7月26日 帆船「みらい」へ参加者へのイベント(会場:マリンピア日本海)

と4件行った。どの回も参加者は積極的であった。

⑨ 万代シティバスまつり出展（万代シティバスまつりにてブース展示）

9月23日 万代シティのブースにて、ミズクラゲの生体展示(クラゲ・ポリプ・エフィラ)と一生のお話をメインの展示とし、ミズクラゲの一生の解説用紙を100枚配布した。またカクレクマノミとフンボルトペンギンのペーパーキャップづくり(合計200枚)を行い来場者の作成をサポートしながら配布した。

⑩ 水族館で潟普請

10月6日(土)水族館で潟普請と題し、みなとぴあと共同事業として開催した。体験としては当館のにいがたフィールドで小川と砂丘湖の泥をあげて田んぼに加える作業と、砂丘湖の植物遺骸回収を行うとともに、フィールドで展示されている魚類を紹介した。体験後、作業の意味と役割をみなとぴあの学芸員の方から紹介するとともに、新潟の水田の歴史や水田漁撈の説明を行った。みなとぴあと共同することで、体験だけでなく文化的意義を知ることができるプログラムになった。

⑪ 新潟市中央卸売市場「市場まつり」に出店

10月14日(日)に新潟市中央卸売市場で開催された「市場まつり」に出店し、活魚輸送車の展示解説と見学、マリニピアみずのいきものクイズを行った。

⑫ 新潟青陵大学 青空祭に出店

10月27日(土)・28日(日)地域連携の一環として新潟青陵大学の青空祭に出店し、等身大カリフォルニアアシカ、フンボルトペンギンの展示と解説、オリジナル缶バッチの販売、ショップの水族館グッズの販売、レストランによる軽食販売を行った。

⑬ ゆめづくりサイエンスラボ出張展示:ピックスワン

11月3日(土)に行われた、ゆめづくりサイエンスラボにて、ミズクラゲの展示と、ミズクラゲの一生を顕微鏡を使用しながら紹介するコーナーと、触ったりや想像しながら答えられるようなクイズ大会を開催した。天候も良かったため、多くの来場者が立ち寄り、興味深く解説を聞かれる方が多かった。水族館以外での生体展示はそれだけに集中して観察や解説ができるためかなり教育普及としても効果が高いと感じた。

3. 入館料収入の実績について

平成30年度入館料収入 435,703,446円

[総括]

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適切に実施した。

今年度の入館者数は518,980人で、前年度の526,371人から約7,300人減少した。入館料収入でも435,703,446円で前年度の456,239,052円から20,535,606円減少し、対前年度比95.5%となった。また、客単価も839円であり、前年度の866円から27円下がった。年間パスポート購入者の増加に伴い、会員の入館者数が全体の入館者数を占める割合が増えたことや一般客、団体客の減少が影響したと考えられる。

収入増対策としてゴールデンウィークや学校の長期休業に合わせ、新潟市内の幼稚園・保育園、新潟

市外県内、山形、福島、長野、群馬の小学校へ割引券付チラシ(提示で1組全員2割引)を配布した。また、昨年度同様11月には冬場の閑散期対策として新潟市内の小中学校、幼稚園・保育園に同様の割引券付チラシの配布などを行った。実施期間中、割引券チラシを利用したお客様が多くみられ、一定の収入があり、観光客の来館動機付けに一定の効果があったと考えられる。

昨年度導入した全国共通展開する「子育て支援パスポート事業」では、9,302人のお客様にご来館いただいた。周知が広がればさらに多くのお客様の来館が期待され、また新潟市内のお客様については年間パスポートに移行されることも期待される。

また、リニューアル後導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」や、同じくリニューアル後導入した、会員証の窓口提示で5人まで2割引となる「JAFカード割引」も継続して実施している。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施した。今後も来館する幼稚園・保育園、小学校、老人施設、福祉施設などが増え、質量ともに負担のかかる業務になることが予想されるが、団体休憩室の予約など状況を把握し不備のないよう行っていきたい。

4. 管理経費等の収支決算について

[総括]

必要な物品購入や委託、修繕工事等を十分に精査し経費削減に努めた。

人件費は、昇給に伴い増加傾向であるが、その他の管理経費は、経費削減に努め予算の範囲内で管理運営を行うことができた。

海水取水設備においては、取水先端部海底面の上昇により取水口付近の着砂が進行し、取水口の埋没が懸念されたことから、平成27年度より新潟市と協力しながら対応を行い、恒久対策としての取水管200m延長工事が完了した。これにより、今年度は冬期の海水着水槽の植物片の流入がなくなったため、大型吸引車を使った除去作業を行わずに済んだ。ただし、水族館の生命線である海水取水設備であることから、水族館と施工業者が密に連絡を取り協力しながら、毎年の保守点検等で今後も注視していかなければならない。

経費が嵩む工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所では不具合が依然として発生しており、その都度修繕工事を行ってきた。また、リニューアル工事で更新した建物・設備についても、少しずつ不具合が生じてきており修繕工事を行っている。逆に経費を抑えるための対策として、光熱水費について夏場の最大電力を抑えるため設備の運転時間を間欠したり、空調の設定温度を下げるなど積極的に節約を行なった。その他にも周辺道路・駐車場の警備員を実態に沿った人員配置を行なったり、特別展の会場設営を出来るだけ自前で行うなど経費削減に努めた。

また、平成27年度末に導入した活魚輸送車については、引き続き魚類搬入に際し計画的に活動を行った。魚類購入の際、業者に依頼することなく自前で多くの魚類を購入・運搬することが出来たことから、経費削減に貢献することができた。

工事については、リニューアルから6年が経過し不具合による修繕工事費が依然として嵩んでいることから、来年度も大規模修繕が発生した場合は、市と相談しながら行っていきたい。

次期指定管理期間も「最小コストで最適な管理」目指し、かつ、お客様への快適なサービス提供を図るという基本原則に則り水族館の運営を行っていきたい。

5. 自己評価に関する事項について

公の施設目標管理型評価書のとおり

6. 最後に

今年度の入館者数は、518,980人(対前年度比98.6%)、入館料収入は、435,703,446円(対前年度比95.5%)と、昨年度と比較し共に減少した。事業計画書で掲げた入館者数目標値の525,000人、入館料収入目標値474,582,000円にも及ばなかった。昨年同様行った「年パスキャンペーン」により年間パスポート購入者が増加したものの、上越市立水族博物館「うみがたり」オープンの影響により、団体や個人入館券での入館者が減少したことが原因と考えられる。リニューアルオープン後、年々減少することは一般的な傾向ではあるが、入館者数では、リニューアル後6年連続で510,000人を超えた。入館収入では入館者数440,286人であった平成17年とほぼ同じ水準であった。

入館者の満足度については、アンケート結果によれば、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が96.5%、イルカショー、解説プログラムで「非常に満足」と「満足」の計が93.0%とリニューアルオープン6年目を迎えた今年度も満足度は依然として高水準を保っている。

また、年間パスポート会員を除くお客様の来館回数については、「はじめて」が33.5%(前年度32.8%)と昨年度と比較し若干増加した。年数が経つにつれ「はじめて」が減ることは当然であるが、県外からのお客様では「はじめて」が全体の63.1%と最も多く、県外においてはまだ来たことがない観光客が潜在的に多いことが伺える。一方、新潟市内のお客様で多くは複数回来館されており、「はじめて」は年々減少している。特に来館回数4回以上は全体の57.8%と圧倒的に多く、「また来たい」と思えるような施設づくりを心がけたことがこのような結果に繋がったと思われる。今後も、いつも来ても新鮮味のある展示に努めることで年間パスポート購入者の増加に繋げ、さらにリピーターとして何度も足を運んでいただくことで入館者数増に繋がりたいと考えている。

施設については、リニューアル工事の対象外であった箇所でも突発的な不具合が依然として生じている。またリニューアル工事を行った箇所でも徐々に不具合が生じている。今後も十分考えられることから、工事未着手の箇所に限らず、全体的に注意深く維持管理すると共に、設計会社が提案した修繕計画に基づき新潟市と相談し、早めの対応で不具合による事故が起こらないよう努めたい。

また、駐車場は、平成28年3月に水族館脇の土地を整備し駐車場として56台増設したことで、繁忙期には周辺駐車場の回転が良くなった。従来の駐車場不足は十分解消されたのではないと思われる。海岸側臨時駐車場(ブロックヤード)の管理については、「みなとトンネル」開通後、水族館のお客様以外の駐車車両が多く、いつ事故が発生しても不思議ではない状況だが、海岸保全区域内の公有財産の使用承認を受けて活用している土地であり、指定管理者単独による管理は非常に困難になってきている。とくに、海岸側臨時駐車場からの道路の横断について、交通信号がなくお客様の安全が確保できないことが懸念されることから引き続き市や警察に働きかけていく必要がある。

水族館を運営する上での懸案事項だった取水設備は、国土交通省の養浜工事の進展により、沖合200mの取水口付近の海底面の上昇が経年的に進行していたが、対策について新潟市と協力しながら段階的に進め、平成27年度に取水口先端部の60cm嵩上げ工事、平成28年度は既存取水口から取水管200m延長を前提とした事前調査・設計、平成29年度から資材製作及び工事を行い、ようやく平成30年度に延長工事が完了した。これにより危機的状況は回避できたが、取水設備は水族館の生命線である海水を調達するための重要な設備であるため、今後も注視していきたい。

ソフト面については、従来のイルカショーやマリンサファリ給餌解説に加え、アクアラボ体験プログラムや磯の生きもの解説など体験型プログラムを充実させている。また、スポットで実施した「にいがたフィールドガイド」や、「育成室開放」「イルカバックヤードミニガイド」、閑散期にはアクアラボ内での企画展示「水深100mを知る-水中探査機で見た！日本海の海底と生物-」や「フォトコンテスト受賞作品展」などを実施した。

昨年度講じた高病原性鳥インフルエンザ対策について、今年度は、周辺で疑われる事例が発生しなかったことから、対策本部は設置せず、念のため職員駐車場入口に消石灰の散布(タイヤ消毒)の対策をおこなったのみだった。今後も渡り鳥が飛来する時期は様々な方向から情報を集め、周辺地域で発生した場合は、マニュアルに沿った対応・対策を行い、来館者、職員、飼育生物を鳥インフルエンザから守ることを最優先に考え被害の防止に努めたい。

WAZA(世界動物園水族館協会)の指摘により、和歌山県太地町でのイルカ追い込み漁からイルカ入手が困難となっている問題については、引き続き JAZA 及び飼育水族館と協議しながら様々な可能性を探っていききたい。

財団については、平成 29 年 3 月に公益財団の認定を受け、平成 29、30 年度の 2 年間、新潟市開発公社との共同事業体として指定管理者の指定を受けた。その実績が認められ、次期指定管理者は新潟市海洋河川文化財団が単独で指定を受けることになり、指定管理期間である 5 年間(2019~2023 年度)引き続き水族館運営を行い、法人としても健全な経営ができるよう努めていきたい。

今年度は 6 月 26 日に上越市立水族博物館「うみがたり」がグランドオープンし、観光客の動向に大きな影響を受けたが、新潟市水族館としては今後もさらなる魅力づくり目指し「水族館業務を行う専門家集団」として平成 2 年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、新財団へ管理者が変更した後も多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。